青山国際政経論集 114 号、2025 年 5 月

論　説

宣教のためのトランスナショナルな挑戦
スペイン系イエズス会士アントニオ・グアスク・イ・ブフィを例に

渡 邊 千 秋*

はじめに

スペイン出身のフランシスコ・ザビエルによる布教開始以降、江戸幕府によるいわゆる「鎖国」とその後の平信徒らの潜伏等、日本におけるローマ・カトリック教会の歴史は「キリシタン史」と分類され、現在まで、学術的研究が蓄積され続ける。具体的な宣教活動、時の政治中枢との関係性、「禁教」後の迫害、潜伏宣教師や平信徒の殉教の歩みなどが体系的にまた詳細にまとめられており、史学研究の一分野をなしている。

しかしながら、いわゆる「禁教」が解かれた明治期以降のカトリック宣教に関する研究は、「キリシタン史」の研究状況と比較すると、まだしかるべき状況に達したとはいえないであろう。確かに、2000 年代に入ってからは、日本とバチカンの間の政教関係を再考する動向がみられ[1)]、「バチカン図書館やバチカン文書館などに存在する日本関係文書の調査研究の結果を広くシンポジウ

＊青山学院大学国際政治経済学部教授

本稿で用いる全 URL の最終閲覧日は 2025 年 1 月 15 日である。
日本語における旧仮名遣い・旧字体は新字体に改めた。現代では不適切と考えられる表現については、史料が書かれた当時の歴史的状況を鑑み、そのまま用いるものとする。

1) たとえば以下を参照されたい。松本佐保『バチカン近現代史：ローマ教皇たちの「近代」との格闘』中央公論新社、2013 年；津村一史『バチカン機密文書と日米開戦』dZERO、2024 年。

ム等にて公開するプロジェクト[2)]」が推進されるなど、新たな試みが浮上する。明治期の「日本の再宣教」を主導したパリ外国宣教会に関する歴史研究の進展も認められる[3)]。しかしそれらを踏まえても、明治末期から大正・昭和期の日本におけるカトリック宣教の歴史に関しては、研究の途上にあるといえるであろう。

本稿では、パリ外国宣教会の聖職者来日から遅れること約50年で日本へ宣教師を送った修道会、イエズス会に注目する。特に第一次世界大戦中に大学教員として来日した、あるスペイン人神父の歩みについて考察したい。彼は設立されて間もない上智大学で教鞭をとった宣教師であるが、折しも日本の委任統治とからんで代牧区がつくられた南洋群島に派遣される同僚らの世話役となり、そして自分自身も南洋で宣教活動を展開したのち、ラテンアメリカとスペインのあいだを往還することとなった。本稿では、現在のような発展した交通機関のない時代に、宣教のために動きつづけた一人のイエズス会士のトランスナショナルな挑戦について論じたい。

イエズス会「再来日」後、初のスペイン人宣教師、グアスク神父

スペイン国籍をもつイエズス会宣教師として、キリスト教の禁教が解かれたのちの帝国日本へと最初にやってきたのは、管見の限りでは、アントニオ・グアスク・イ・ブフィ (Antonio Guasch i Bufí) 神父であった[4)]。スペイン、イビサ島のサンタ・エウラリアという町に1879年5月4日に生を受けた彼は、

2)「バチカンと日本のヴェールに包まれた歴史の交流、その解明の扉が今開かれる100年プロジェクト」は、公益財団法人角川文化振興財団主催、教皇庁文化評議会他後援、文化庁・独立行政法人日本芸術振興会の助成を受ける。https://www.kadokawa-zaidan.or.jp/vj100/

3) 明治前半の宣教師の活動状況を明らかにする書簡の日本語訳が出版されたことはその好例である。中島昭子『テストヴィド神父書簡集』ドン・ボスコ社、2017年。

4) 本稿では、上智大学の第一号教員名簿にある表記に従い、以下「グアスク神父」と記述する。なお、彼の姓に関しては、この表記の他に、文献によっては「グアッシュ」「グワッシュ」という表記も見られる。上智学院ソフィア・アーカイブズ、「第一号教員名簿」85/C55/046.

1896 年 3 月に、バレンシア地方のガンディアでイエズス会に入会した[5)]。アラゴン管区に所属、ガンディアをはじめ同管区管轄下のアラゴン地方ベルエラやカタルーニャ地方トルトサなどにあったイエズス会の学校で長い聖職者養成の日々を過ごした。またオランダのマーストリヒト郊外、ファルケンブルグにあったイエズス会が運営する学院での学びを通じて司祭職への神学的準備をなし、1911 年 9 月には司祭に叙階された[6)]。その後、1914 年 2 月にスペインのバルセロナで最終誓願をたてた[7)]。

グアスク神父は、このオランダでの養成過程で、同校で哲学を教えその後上智大学初代学長となるヘルマン・ホフマン神父と知り合ったとされる[8)]。そして、この時の親交をつてに、1916 年 11 月に来日した[9)]。来日以前にグアスク神父は、ドイツ語の文法・発音に関する書籍を出版しており[10)]、またスペインのイエズス会・アラゴン管区の目録では、ドイツ語の言語学博士であり護教論の専門家として記載がある[11)]。加えて来日後には、日本での宣教に当たる唯一のスペイン人として、またスペイン語の言語学博士として記載されることとなった[12)]。

---

5) 2025 年 1 月現在、神父の生家は、イビサ民族博物館として使用されている。同博物館の URL は以下の通り。https://www.museuetnograficdeivissa.es/

6) J.BAPTISTA: «GUASCH, Antonio», en C.E. O'NEILS SI y J.M. DOMÍNGUEZ SI (eds.) *Diccionario histórico de la Compañía de Jesús. Biográfico-Temático II*, Madrid, Institutum Historicum SI y UPCO, 2001, p.1829.

7) Societatis Iesu: *Catalogus Provinciae Aragoniae. Ineunte Anno MCMXV*, Barcinone, Typis Eugenii Subirana, 1914, p.108. なお、以下この目録について、書名の一部分、Catalogus Provinciae Aragoniae を *CPA* と略する。

8) スペイン語を教える教員派遣がイエズス会本部から通達され、ホフマン神父は 2 名の候補の中から既知であるグアスク神父を選択したという。上智大学史資料集編纂委員会編『上智大学資料集第 2 集 (1913-1928)』昭和 57 年、153 頁。

9) フィステル、パウロ編『日本のイエズス会史：再渡来後、1908 年から 1983 年まで』イエズス会日本管区、昭和 59 年、32 頁。

10) Antonio GUASCH SJ: *Antología alemana. Ejercicios de manuscrito alemán. Reglas y ejercicios de pronunciación*, Barcelona, Tip. Católica, 1914.

11) Societatis Iesu: *CPA. Ineunte Anno MCMXV*, Barcinone, Typis Eugenii Subirana, 1914, p.4.

12) Societatis Iesu: *CPA. Ineunte Anno MCMXVIII*, Barcinone, Typis Eugenii Subirana, 1917, p.85.

日本におけるカトリック高等教育を担当する修道会として、1908 年にイエズス会は再来日を果たした。その後の準備期間を経て、上智大学が設立されることとなった。1913 年に予科・本科からなる専門学校としての開講が文部省により認可され、1915 年には最初の入学者が本科へと進学した[13)]。グアスク神父は、ホフマン初代学長らとともに紀尾井町 7 番地 1 に居住しつつ、教育活動に従事した。グアスク神父は、スペイン語教育も行うようにとするイエズス会総長からの強い要望により来日したものの[14)]、当時の上智大学には。スペイン語教育を専門とするイスパニア語学科は未だ存在しておらず、グアスク神父は主としてドイツ語を教授した[15)]。また現在の東京外国語大学の前身である東京外国語学校西語部において、1917 年以前の大正期にグアスク神父が 3・4 カ月程度講師を務めたとする記録が残る[16)]。

イエズス会、南洋群島を宣教活動の地域とする

上智大学他で高等教育機関における語学教育を担当したグアスク神父であったが、彼の活動内容は時間の経過とともに変化を遂げる。その背景には、帝国日本のミクロネシアへの領土拡大と同地域でのカトリック宣教活動の展開とが密接に関係していた。

以下、グアスク神父来日前後の時期におけるミクロネシア地域のカトリック宣教の状況について整理しておきたい。

1898 年の米西戦争で敗北したスペインは、アメリカ合衆国にフィリピン・グアムを割譲した。他方、当時、ドイツは中国から租借権を得た青島を東洋艦

13) シャッツ , クラウス『上智大学の設立』ソフィア・アーカイブズ、2022 年、102 頁。

14) Theodor GEPPERT: *The Early Years of Sophia University*, Tokyo, 1993, p.74.

15) 上智学院ソフィア・アーカイブズ資料のうち、以下にグアスク神父の情報がある。85A/5/004; 85A/5/005 85A/5/014; 85A/5/18; 85A/6/010; 85A/6/021; 85A/7/015; 85A/7/019; 85A/8/018; 85A/8/031; 85A/9/003; 85A/9/011; 85A/9/013; 85A/10/016. なお、当該資料の閲覧にあたり、同アーカイブズの後藤暁子氏にご尽力いただいたことに深く感謝申し上げる。

16) 東京外国語大学『東京外国語大学史：独立百周年 (建学百二十六年) 記念』東京外国語大学、1999 年、702 頁。(https://www.tufs.ac.jp/common/archives/TUFShistory-spanish-2.pdf)

隊の拠点として定めた時期であったことをうけて、国内政治の混乱のなかで財政的問題を抱えるスペインは、1899 年、カロリン・マリアナ諸島をドイツに売却した。これによって、ドイツは東洋の海を支配する野望を拡大したのであった[17]。そして、ドイツはアメリカ合衆国領となったグアムを除くカロリン・マリアナ諸島をニューギニア保護領に編入し、ポナペ島・ヤップ島に政庁を置いて統治を開始したのである[18]。

このようにしてドイツ領となった南太平洋にうかぶミクロネシアの島々のカトリック宣教は、主としてカプチン会や聖心会のドイツ人宣教師に委ねられた。他方で、アメリカ合衆国領となったグアム周辺には、グアム代牧区が 1911 年に設置され、初代司教としてスペイン・バルセロナ出身のカプチン会士、F. J. ビラ・イ・マテウが着座した。以降、第二次世界大戦終了までのあいだ、スペイン・カタルーニャ地方または同国バスク地方出身のスペイン人カプチン会士が、この代牧区の司教に任命された[19]。

ドイツ人によるミクロネシアでの宣教活動は、第一次大戦における日本軍によるこの地域への侵攻によってとん挫した。1914 年 8 月には、日本はドイツに宣戦布告し、帝国海軍は、イギリス帝国オーストラリア艦隊とともに、ドイツ領であったミクロネシアへと南遣支隊を派遣してこの地域を制圧・占領したのである。同年 12 月末には、臨時南洋群島防備隊条例を発布、トラック諸島トノアス島に司令部を置き、翌 1915 年 1 月には、南洋群島占領諸島施政方針が定められた。このようにして、この地域には開戦後早々と、帝国日本による

17）志村秀吉『海の生命線熱帯の日本』大南洋社、昭和 9 年、頁 33-34。

18）韓晳曦『日本キリスト教海外伝道史の研究』同志社大学博士論文 (神学、乙第 141 号)、1997 年、209 頁。

19）彼に続くグアム司教 3 名と在位期間は以下の通り。A. J. ベルナウス・イ・セラ (1913); J. F. オライス・イ・サバルサ (1914-1933); A. オラノ・イ・ウルテアガ (1934-1945).　スペイン系最後のグアム司教、オラノの残した文書については、以下を参照されよ。Yumi NAGASE: «La visión de Guam del obispo Miguel Ángel Olano: Descripción de las fuentes archivísticas (1918-1970) », *Naveg@mérica. Revista electrónica editada por la Asociación Española de Americanistas,* n. 28, 2022. (https://doi.org/10.6018/nav.505871)

軍政が敷かれたのであった[20]。

大戦後の講和会議を経て、1920 年 12 月、C 式委任統治条項が決定され、帝国日本はマーシャル諸島、カロリン諸島、マリアナ諸島からなる広大な島嶼部を日本の委任統治領として受諾した。C 式は３つあった委任統治の方式のうち受任国に最も広い裁量を認めるものだったが、他方、先住民の文明化や領域の非武装化などの義務を負わせるものでもあった[21]。

同条項によれば、

> 公ノ秩序又ハ善良ノ風俗ノ維持ニ関スル地方的法規ニ反セザル限リ受任国ハ本地域内ニ於テ良心ノ自由並各種礼拝ノ自由執行ヲ確保シ又連盟国ノ国民タル一切ノ宣教師ガ、其ノ職務ヲ行フ為、本地域内ニ至リ旅行シ又ハ居住スルコトヲ許スベシ[22]

とあり、公安良俗を害さない限りにおいて、先住の人々に対する信教の自由が認められた。と同時に、帝国日本政府は、既にキリスト教信仰をもつ先住民の宗教的権利を保障する必要性に迫られてもいた[23]。そのため、教皇庁に宣教師派遣を依頼することで住民の不安を解消し、またヨーロッパ諸国からの対日批判に対応しなければならなかった[24]。

南洋群島占拠以降、帝国日本政府はカプチン会・聖心会などに属する、聖職者であるとはいえ敵国ドイツ人でもある宣教師の南洋群島からの追放を決定、

20）南洋経済研究所編『南洋群島年表』(南洋資料 : 第 300 号)、南洋経済研究所出版部、昭和 18 年、頁 8-10。(https://doi.org/10.11501/1095648)

21）酒井一臣「『文明の使命』としての日本の南洋群島委任統治」, 中京大学社会科学研究所・国際関係から見た植民地帝国日本プロジェクト編『南洋群島と帝国・国際秩序』中京大学社会科学研究所、2007 年、59 頁。

22）外務省条約局『委任統治領南洋群島（外地法制誌第５部）前編』外務省条約局法規課、1962 年、48 頁。

23）カトリック宣教師のみならず、プロテスタント宣教師に対しても国家による援助は行われていた。たとえば、プロテスタントの南洋伝道団は経営の大半を政府補助金によっていた、という。韓晳曦『日本キリスト教…』241 頁。

24）皿木喜久『軍服の修道士山本信次郎』産経新聞出版、2019 年、171 頁。

彼らに代わる宣教師の派遣を教皇庁と交渉することとなった。教皇庁側は、更迭されるドイツ人カトリック聖職者を引継ぐ者として同じカトリックの聖職者が派遣されるよう強く求めた。位階制に基づき、聖職者と平信徒との役割が規定されるカトリックにおいて、平信徒の信仰実践を保障するには、聖職者の存在が絶対的に必要であるからである。帝国日本政府は日本人の聖職者の派遣を望んだが、実際には全国を見渡しても 50 名程度しかいなかった日本人のカトリック聖職者を即時に派遣することには無理があった。帝国日本政府は教皇庁と直接交渉したが、結果として宣教活動に従事しうる日本人聖職者を派遣することは不可能であると判断された[25)]。最終的に教皇庁は、イエズス会に宣教師派遣を委託した[26)]。

当時のイエズス会総長だったヴロディミール・レドホフスキは、第一次世界大戦においては中立国であり、また歴史的にもこの地域との関係が深いスペイン人のイエズス会宣教師を派遣することとした[27)]。多数のスペイン人イエズス会士がこの宣教プロジェクトに志願したといわれる[28)]。そのなかから、S. ロペス・デ・レゴ神父がカロリン・マリアナ諸島に向かう宣教師の上長として任命された[29)]。

イエズス会では、1919 年の山本信次郎斡旋の交渉では、マーシャル諸島は宣教対象の範疇に含まれていなかったと考えられている。帝国日本政府はスペ

25）この交渉を担ったのが当時海軍大佐であった山本信次郎である。交渉内容の詳細については、「大正 8 年 8 月羅馬出張報告　海軍大佐山本信次郎 (1)」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C11080607100, 大正 8 年　海軍大佐山本信次郎羅馬出張報告（防衛省防衛研究所）」を参照されたい。

26）フィステル、パウロ編『日本のイエズス会史…』5 頁 .

27）17 世紀にマリアナ諸島のチャモロに対する宣教を行ったイエズス会士としては、D. L. デ・サン・ビトーレスが知られる。彼の歩みについては , 以下を参照されたい。高山勝「マリアナ諸島の先住民チャモロに対するスペインによる初期カトリック宣教」『基督教研究』64 巻 2 号、2002 年、頁 86-93。(https://doshisha.repo.nii.ac.jp/records/11644)

28）Ángel SANTOS HERNÁNDEZ, *Jesuitas y obispados. Los jesuitas obispos misioneros y los obispos jesuitas de la extinción*, tomo II, Madrid, UPCO, 2000, p.326.

29）フィステル、パウロ編『日本のイエズス会史…』5 頁。

イン人イエズス会士にマーシャル諸島での活動も依頼したが、別の代牧区に属する地域に勝手に出向くことはできないということで、改めて解決書面にて解決を求められたという[30]。イエズス会がマーシャル諸島での宣教を行わない旨であることが伝わると、日本では驚きが広がったと言われている[31]。イエズス会が担当することとなる代牧区の地理的範囲確定には、しばらく時間を要した[32]。1923 年 10 月には、あるイエズス会士の書簡にニューギニアのレジデンスを閉鎖して、日本へと宣教地を移動する予定である、という記述がみられる[33]。また、実際のところ、マーシャル諸島では、目録上、イエズス会宣教師がいない年が存在する[34]。このような状況からは、宣教の行方は不明瞭であったと考えるべきであろう。

1922 年 3 月に民政へ移管された委任統治領南洋群島では、カロリン諸島のコロール島に南洋庁が設置され、行政管理システムの運用が開始された。しかし、カトリック教会からみれば、南洋群島が宣教区として、つまりカロリン・マリアナ・マーシャル諸島代牧区として正式に成立したのは 1923 年のことである。当時、人口 52222 人が居住した南洋群島で宣教・司牧活動を展開するため、代牧区では主要な群島ごとに宣教の分担地域を区分した。カロリン群島は中央部トラック島、西部パラオ島・ヤップ島、東部ポナペ島の 3 域に分割、マリアナ諸島の範疇のサイパン島・ロタ島、そしてマーシャル諸島・ヤルート

30) Carta de Martín Espinal SJ al P. Provincial, 16 febrero 1921, *Cartas edificantes de la Provincia de Castilla,* tomo IX, Oña, Imprenta Privada del Colegio, 1921, p.220.

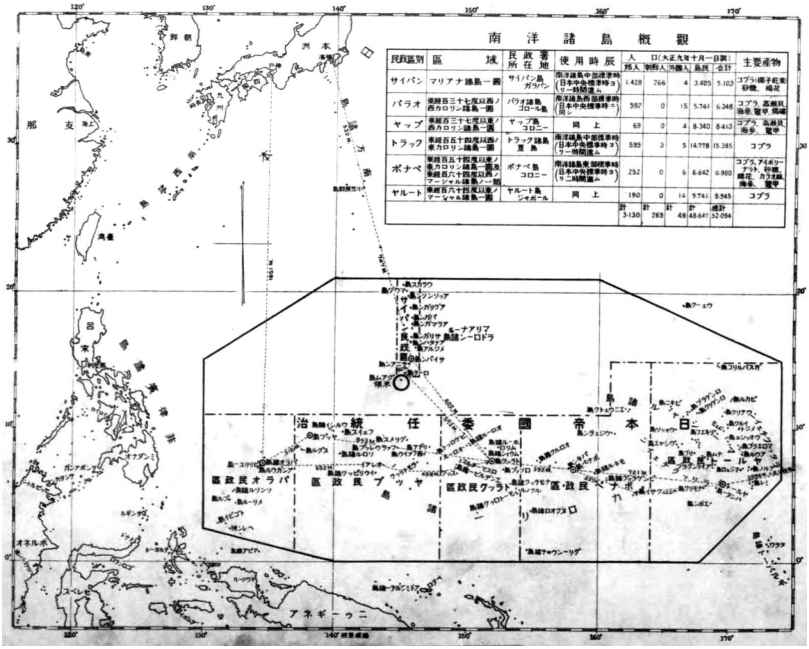
31) Carta de Dionisio de la Fuente SJ, 18 de julio de 1921, *Cartas edificantes de la Provincia de Castilla, tomo* IX, Oña, Imprenta Privada del Colegio, 1921, p.244.

32) たとえば 1921 年の目録には「カロリン諸島・パラオ諸島」への派遣途中にあるイエズス会士の名前がみられ、同じく 1922 年から 1924 年の目録には「マリアナ・カロリン諸島」のイエズス会士が掲載され、マーシャル諸島が宣教地と記されるのは 1925 年用の目録からである。

33) Carta de Vicente Guimerá, SJ a Luis Campos Górriz, 15 octubre 1923. Archivo Luis Campos Górriz, Archivador 1922-1924.

34) Societatis Iesu: *Catalogus Provinciae Baetica. .Ineunte Anno MCMXXVI*, Hispali, Typis Eulogio de las Heras, 1925, p.45.　なお、以下この目録について、書名の一部分、Catalogus Provinciae Baeticae を CPB と略する。

島などに教会が置かれた[35]。1924 年調査では、この代牧区には全体で、司祭 13 名・修道士 13 名が派遣された。この頃、地域全体のカトリック平信徒の総数は 11755 人であった[36]。聖職者は、約 2100 ㎢もの拡がりに点在する島々の平信徒への司牧活動を行い、また新たな平信徒を獲得するのための宣教活動を展開したのであった。



【参考地図】 海軍省 (編)『日本帝国委任統治南洋群島写真帳』（大正 11 年）より

35) Catholic Chuo Shoin (ed.) *L'Eglise Catholique dans L'Empire Japonais*, Catholic Chuo Shoin, 1937, p.155.　カトリック教会側の領域の「分割」自体は、日本政府側による政治的なものと大部分重なるが、南洋庁の中心がパラオ諸島コロール島に置かれた点は異なると言えよう。

36) 日本基督教連盟編『基督教年鑑 大正 15 年』日本基督教連盟、1925 年、196 頁。

グアスク神父と南洋群島とのかかわり

1920年12月、バルセロナを出立したスペイン人宣教師は22名、翌1921年1月になって、彼らは南洋方面への中継地となる日本へと到着した。この折には、山本信二郎の要請により帝国日本政府がマリアナ諸島への渡航の費用を支払った。また海軍副大臣は宣教師らを夕食に招き、南洋群島への通行許可を与えたのだった[37)]。

この時のミクロネシア宣教への志願者は、いわば先遣隊の構成者としてとらえることができよう。言語学者であったグアスク神父は、通訳として南洋代牧区の上長であるロペス・デ・レゴ神父に付き添った。1921年3月2日、彼らはまず、サイパン島に上陸した[38)]。イエズス会士はヤップ島から一旦引き揚げ、マリアナ諸島サイパン・ロタ島を宣教対象の島としたのであった[39)]。

ポナペ島へむかうイエズス会士、カストロ神父とエレラ神父そして彼らの上長であり後に代牧区司教となるロペス・デ・レゴの移動にグアスク神父は付き添い、ドイツ人カプチン会士が残した住居等を訪れている[40)]。この折のグアスク神父の報告は、イエズス会宣教師の定住地決定に大きな影響を与えたと考えられる[41)]。結果として、トラック諸島のトロアス島に、ロペス・デ・レゴ神父の居住地は定められた[42)]。1923年になって、ロペス・デ・レゴ神父はディオニシオポリス名義司教に任命され、正式に代牧区を統括することとなった[43)]。なおこの任命式典は東京で行われた[44)]。

37）«Varia. Japan», *The Woodstock Letters*, vol. L, n. 2, 1920-1921, pp.252-253.

38）Provincia de Andalucía de la Compañía de Jesús (ed.): *Carolinas. Anuario 1947. Héroes. Misión de las islas Carolinas, Marianas y Marshalls,* Provincia de Andalucía de la Compañía de Jesús, 1946, p.116.

39）Carta de Dionisio de la Fuente SJ a Ignacio Arbeloa SJ, en *Cartas edificantes de la Provincia de Castilla,* tomo IX, Oña, Imprenta Privada del Colegio, 1921, p.217.

40）Carta de José S. Pájaros SJ al P. Provincial, en *Cartas edificantes de la Provincia de Castilla,* tomo IX, Oña, Imprenta Privada del Colegio, 1921, p.255.

41）このような感覚を派遣されたイエズス会士自身が抱いていたことに注目されたい。

42）Ángel SANTOS HERNÁNDEZ: *Jesuitas y obispados. Los jesuitas obispos misioneros y los obispos jesuitas de la extinción*, tomo II, Madrid, UPCO, 2000, p.326.

43）Alexandre COELLO DE LA ROSA: *Gathering Souls: Jesuit Missions and Missionaries in Oceania (1668–1945)*, Brill, Liden and Boston, 2019, p.95.　グアスク神父のこの言は、他の神父の手紙のなかにみられる伝聞事項である。

44）J.BAPTISTA: «GUASCH, Antonio»…, p.2148.

このようななかで、グアスク神父は、現地の状況把握につとめ、イエズス会総長に情報を提供した。彼によって、山本信次郎も教皇公使F. ビオンディも、カプチン会士がマリアナ諸島で宣教することを望んでいなかったということなど、宣教地決定の核心に触れる情報がもたらされた[45]。

1922年から、グアスク神父は東京をベースとしたマリアナ・カロリン諸島供給部の業務を担った。重要な業務の1つに、島々に散り散りになったスペイン人宣教師とスペインのイエズス会、そして友人・家族などとのコミュニケーションを円滑にすすめる手助けをする、ということがあった。島々に個別に郵送されると不達になるであろう可能性を見越し、スペインでは、南洋群島へむけた郵便物の暫定的宛先として、紀尾井町7番地1のアントニオ・グアスクに直接送付するよう指示された[46]。また、スペイン側でも、はじめはマドリード、そして後にグラナダに供給部が設けられ、連絡業務にあたるイエズス会士が割り充てられた[47]。

グアスク神父は、日本側の供給部責任者として、南洋群島とスペインとのあいだを行き来するイエズス会士に協力した。たとえばポナペ島へと派遣される予定の神父を出迎える様子は、以下のように描かれている。

> 私たちのカロリナ諸島供給部長グアスク神父が迎えに来てくれるかどうか確かではなかったので、ドン・エンリケと共に東京への入国を調整した、ドン・エンリケは犠牲とデリカシーをもって、私をイエズス会神父たちのカトリック大学まで連れていってくれようとした。しかし私が船室で身の回りのものを整理するのに気を取られているときに、そして私のパスポートを確認するのに呼ばれる折に、よき人グアスク神父が現れ、大きな声で

45) Carta de Dionisio de la Fuente SJ a Ignacio Arbeloa SJ, *Cartas edificantes de la Provincia de Castilla*, tomo IX, Oña, Imprenta Privada del Colegio, 1921, p.217.

46) Societatis Iesu, *CPA. Ineunte Anno MCMXXII*, Barcinone, Typis Eugenii Subirana, 1921, pp.78-79.

47) 当初は、バエティカ管区のA. ガルシア・バルデカサス神父が担当した。

ブルサコはどこかと尋ねた。頭をあげると、そこに彼がいた[48]。

供給部の業務をグアスクが管理するようになると、スペインから持ってくるべきもの、日本で調達するべきもの、といった必要な生活用品の詳細を伝えるのもグアスクの役目となった。1922年の時点で、供給部の南洋群島内の第一支部がサイパン島に置かれ、サイパンから他の島々に南洋産の石鹸、砂糖そしてタバコなどの物資が配布されたという[49]。

また、グアスク神父は、聖職者となろうとする 南洋群島出身の青年を、神学を学ばせるためフィリピンのマニラにある神学校へ送った。彼らは、南洋群島を統治する日本人の役人らとコミュニケーションをとることができるよう、東京で日本語を勉強していた人々であった[50]。このようにして、グアスク神父は供給部の仕事を行いながら、代牧区全体を行き来する人やモノの移動管理を統括し、代牧区司教ロペス・デ・レゴの秘書の役割も果たした[51]。

1925年以降は、供給部の責任者が交代し、グアスク神父は、自身も南洋群島での宣教活動に従事することとなった[52]。1926年には、モートロックでエスピナル神父の不在中の福音宣教を支えた[53]。

---

48) Carta de Francisco de P. Burzaco SJ al R. P. V. Leza SJ, 5 de febrero de 1922, *Cartas edificantes de la Provincia de Castilla*, tomo X, Oña, Imprenta Privada del Colegio,1922, pp.334-335.　ここでドン・エンリケと言及されている人物は、船で一緒になった一般人、Enrique Bayle y del Villar であり、彼はその後ラテンアメリカへと向かう予定であった。

49) Carta de Dionisio de la Fuente SJ a Ginés Múñoz SJ, 1 de febrero 1922, *Cartas edificantes de la Provincia de Castilla.* tomo X, Oña. Imprenta Privada del Colegio, 1922, p.336.　なお、タバコは先住民の平信徒用であると記される。

50) «Varia. Japan», *The Woodstock Letters*, vol. LIII, n. 1, 1924, p.109.　この時は4名の派遣であり、関東大震災後の諸事情が関連している可能性がある。また4名の氏名は、カトリックタイムスに記載された。公教青年会「南洋神学生とレゴ教区長 東京における記念撮影」『カトリックタイムス (The Catholic Times)』大正13年1月21日、3頁。

51) Societatis Iesu: *CPB. Ineunte Anno MCMXXVI*, Hispali, Typis Eulogio de las Heras, 1924, p.44 y p.82.

52) アロイシオ・ファベール神父がその任にあたった。フィステル、パウロ編『日本のイエズス会史…』52頁。

53) Carta de Ramón Lasquíbar SJ a J. Nemesio Güenechea SJ, marzo de 1926, en *Cartas edificantes de la Provincia de Castilla.* tomo XIV, Oña, Imprenta Privada del Colegio, 1926, p.156.

南洋群島という広範な地域のなかでは宣教の進展状況には差があったと思われる。なかでも、マーシャル諸島でのカトリック宣教活動は良好だったとはいえない[54]。既に述べたことではあるが、1926年用のバエティカ管区の目録では、マーシャル諸島へ派遣される宣教師の人名欄は完全にブランクである[55]。しかしながら、グアスク神父に関しては、同地域の先住の人々に洗礼を授けたことが述べられている。

> 今日、他の島の、グアスク神父がやってきた。80人の異端者に洗礼を授け、その他の人々も良好な状態のようである[56]。

グアスク神父は、少なくとも1927年から1928年にかけてこの地域の宣教師として働いた[57]。しかしながら、ほどなくしてグアスク神父は南洋群島を離れることとなった。

南洋群島から南米へ、スペインへ、そしてまた南米へ

グアスク神父の活動の場は、その後、一時的にブラジル、サンパウロの聖ゴンサロ教会に移った[58]。この教会は19世紀末の設立で、ポルトガル人コミュニティの影響によりポルトガル出身の聖人の名がつけられているが、実は、イエズス会が1926年に、サンパウロの日本人コミュニティへの布教活動を開始

54) ある書簡には「(宣教師は) 誰もここには来たがらない、というのも人が少なすぎて、来る者の熱意を削ぐのだ。」と言った記述も見られる。Carta de Ramón Lasquíbar SJ a J. Nemesio Güenechea SJ, marzo de 1926, *Cartas edificantes de la Provincia de Castilla.* tomo XIV, Oña, Imprenta Privada del Colegio, 1926, p.156.

55) Societatis Iesu: *CPB. Ineunte Anno MCMXXVI*, Hispali, Typis Eulogio de las Heras, 1925, p.45.

56) Carta de Aniceto Arizaleta SJ, 24 de enero de 1926, *Cartas edificantes de la Provincia de Castilla,* tomo XIV, p.153.

57) Societatis Iesu: *CPB. Ineunte Anno MCMXXVII*, Comillas, Typis Privatis, 1926, p.45; Societatis Iesu: *CPB. Ineunte Anno MCMXXVIII,* Comillas, Typis Privatis, 1927, p.43. グアスク神父と共に、エスプニイ修道士が派遣された。

58) Societatis Iesu: *CPA. Ineunte Anno MCMXXIX*, Barcinone, Typis Ibérica, 1928, p.93.

した教会でもある[59]。しかしその後、ブラジルでの宣教司牧を始めて2年ほどたつと、グアスク神父はスペインへ戻ったようである[60]。1931年用のアラゴン管区の目録には、当時バルセロナにあったイエズス会経営の学校で、ラテン語・英語を教えた記録が残る[61]。

1931年4月、スペインでは第二共和政が樹立した。国家のライシテを追求するスペイン第二共和国政府により、1932年イエズス会は解散させられ、それにともなってイエズス会士はスペイン国外へと追放された。そのような状況のなか、グアスク神父は再びラテンアメリカの地を踏むこととなった。彼は、イエズス会アルゼンチン管区の管理下にあるパラグアイへと移動し、オルケタの教区司祭として働いた[62]。

その後、アルゼンチン共和国のコルドバへ移り、教育活動に従事し[63]、ブエノス・アイレスのビリャ・デボート地区にあった神学校で、ラテン語・ギリシア語といった古典語を教授した[64]。そうして、1942年以降は再びパラグアイへ戻り、アスンシオンの王たるキリスト教区教会での司牧・宣教活動に従事し、貧困地域で公教要理を教え、神学校や専門学校でラテン語や護教論を教授する、などの経験を積んだ[65]。

59）ペドロ大西（水野一訳）『ドミンゴ中村長八神父－ブラジル日本移民の使徒』聖母の騎士社、2007年、頁73-74。

60）Societatis Iesu: *Catalogus Viceprovinciae Brasiliae Centralis, Ineunte Anno MCMXXX*, 1930, p.18. グアスク神父のブラジル滞在が確認できるのはこの目録までである。

61）Societatis Iesu: *CPA. Ineunte Anno MCMXXXI*, Barcinone, Typis Ibérica, 1930, p.22.

62）Societatis Iesu: *CPA. Ineunte Anno MCMXXXIV*, Barcinone, Typis Ibérica, 1934, p.59; Societatis Iesu: *CPA. Ineunte Anno MCMXXXV,* Barcinone, Typis Ibérica, 1935, p.59; Societatis Iesu: *CPA. Ineunte Anno MCMXXXVI*, San Remo, Apud Procrationem Missionum, 1936, p.61; Societatis Iesu: CPA. *Ineunte Anno MCMXXXVII*, San Remo, Apud Procrationem Missionum, 1937, p.54.

63）Societatis Iesu: *CPA. Ineunte Anno MCMXXXIX,* San Remo, Apud Procrationem Missionum, 1939, p.61.

64）Societatis Iesu: *CPA. Ineunte Anno MCMXL,* Barcinone, Typis Ibérica, 1939, p.90; Societatis Iesu: *CPA. Ineunte Anno MCMXLI*, Barcinone, Typis Ibérica, 1940, p.89.

65）Societatis Iesu: *CPA. Ineunte Anno MCMXLII*, Barcinone, Typis Ephem. Ibérica, 1941, p.95; Societatis Iesu: *CPA. Ineunte Anno MCMXLIII*, Barcinone, Typis Ephem. Ibérica, 1942, p.98; Societatis Iesu: *CPA. Ineunte Anno MCMXLVIII*, Barcinone, Typis Ephem. Ibérica, 1947, p.108

パラグアイでのグアスク神父の活動のなかで特筆するべきは、グアラニー語の文法書をスペイン語で執筆したことであろう[66]。彼自身が述べるところによれば、この本は初修者を助けるために書かれた書籍であった。古典語・近代語教員としてのグアスク神父は、先住の人々にとってのネイティブ言語としてのグアラニー語はほぼ無視される形で、学校教育でスペイン語が教えられている状況を嘆いた。そして、新たにグアラニー語を学ぶ人々に対しては、可能ならグアラニー語をきちんと知るお年寄りから直接的・実践的に学ぶことを勧めた。著者のことばとして、この書籍の冒頭には次のような表現がみられる。

> 最終的な助言をとおっしゃるなら、古い文法書を捨てなさいということです。私自身も機会があるごとに使ってきましたし、その著者を心より尊敬しますが、もはやそこから得られる果実は乏しく、ゼロに近いからです。そして、「私たちの最良のアカデミー会員」として、お年寄りを推薦したいと思います[67]。

グアクス神父は、のちにグアラニー語・グアラニー文化の専門家となる若きイエズス会士、バルトロメ・メリア神父にグアラニー語の基礎を教えた人物となる[68]。また、グアスク神父はスペイン語ーグアラニー語・グアラニー語ースペイン語の辞書を編纂した[69]。この辞書は現在でも、グアラニー語研究上

66）Antonio GUASCH SJ: *El idioma guaraní. Gramática. Vocabulario doble. Lecturas. Asunción,* Imprenta Nacional, 1944.

67）«Dos palabras del autor», en Antonio GUASCH SJ: *El idioma guaraní*…, p.5. この書籍の PDF は、以下の URL からダウンロードできる。
https://www.scribd.com/document/688550513/EL-IDIOMA-GUARANI

68）メリア神父 (1932-2019) はスペイン・マヨルカ島出身。言語学者・人類学者であり、パラグアイの先住民の言語存続のために尽力した。また先住民に対する土地収奪などの不正を非難した。1976 年、アチェ族に対する虐殺に関する政府批判で追放され、1989 年になって帰国した。Cf. https://infosj.es/semblanzas/15868-semblanza-del-padre-bartomeu-melia-sj

69）スペイン国立図書館の蔵書データは以下の通り。Antonio Guasch SJ (ed.): *Diccionario castellano-guaraní y guaraní-castellano, sintáctico, fraseológico, ideológico,* Sevilla, 1961.

の参考資料として用いられる[70]。

おわりに

その後、グアスク神父は、病を得てフランコ独裁体制下のスペインへと戻った。当初はアンダルシア地方コルドバの修練院に滞在し、その後セビーリャに居住した。以降亡くなるまで、新たなグアラニー語辞書の編纂・出版に挑戦し続け[71]、1965 年 6 月 7 日、セビーリャで帰天した[72]。21 世紀となった今でも、パラグアイでは、イエズス会が運営する非営利団体、「和解と正義の実現をめざす社会活動・研究センター」にグアスク神父の名は冠されており、生きたグアラニー語が使用されることを望んだ神父の記憶を留める[73]。

とはいえ、現在のスペインでは、グアスク神父の存在は忘却のかなたにある。生まれ故郷イビサにある「アントニオ・グアスク通り」が、20 世紀の激動の時代にスペインから日本、南洋、そしてラテンアメリカを往還した一人の神父の姿を想起させうる、ほぼ唯一の「手がかり」なのである。

70）たとえば以下の文献を参照せよ。Bruno ESTIGARRIBIA y Justin PINTA (eds.): *Guarani Linguistics in the 21st Century,* Leiden, Brill, 2017.

71）Adolfo REDEL: «Adiós al P. Antonio Guasch, S.J.», *El Ángel del Japón*, núm.142, agosto-septiembre 1965, p.6. なお、グアスク神父は、1961 年 3 月にはセビーリャから、当時、在パラグアイ国スペイン大使であった E. ヒメネス・カバリェーロにあてた手紙のなかで、グアラニー語の辞典を出版する予定であることを伝えている。Carta de Antonio GUASCH a Ernesto GIMÉNEZ CABALLERO, 15 marzo 1961, en el Archivo personal de Ernesto Giménez Caballero. Biblioteca Nacional de España.

72）J.BAPTISTA: «GUASCH, Antonio»…, p.1829.

73）この NGO の沿革に関しては、同組織の HP を参照せよ。https://cepag.org.py/nosotros/

Resumen

Desafíos transnacionales para la misión: Un estudio sobre el jesuita misionero español Antonio Guasch i Bufí SJ (1879-1965)

Antonio Guasch SJ fue el primer jesuita español que predicó en el Japón Imperial al levantarse la prohibición del cristianismo del Shogunato de Tokugawa. Llegó en 1916 para impartir clases en la recién fundada Universidad Sofía de Tokio. Al crearse, como consecuencia de la I Guerra Mundial, el Vicariato Apostólico del "Mandato de Nanyo" (el Vicariato de las Carolinas, Marianas y Marshall) estuvo trabajando en su administración en Tokio. Años más tarde, por poco tiempo, marchó a predicar en esas islas, pasó a Brasil y retornó una temporada a Barcelona. Al producirse la expulsión de la Compañía de Jesús en España por el gobierno de la II República, en 1932, volvió a América Latina, en concreto a Paraguay y se dedicó a estudiar y divulgar la lengua y cultura guaraní con gran éxito. De vuelta en Sevilla, falleció en 1965. Su experiencia, única y memorable, tuvo mucha repercusión, pero permanece en el olvido del gran público.

本論文執筆にあたっては、JSPS 科研費 JP24K15441 の助成を受けた。